

オアシスの森 守ろう

左京区にある宝が池は、江戸時代に水不足解消のために造られた。周辺は競輪場だったが、54年前に市営の公園に。散歩やジョギングを楽しむ場として定着した。身近にある癒やしを求めて出かけると、園内の森は新芽を食い荒らすシカに悩まされ、森を再生する試みが始まっていた。

ぶら 古都



宝が池 (左京区)

くつろぎに出かけた昨夏のことだった。親子がコイにあげた食パンを食べようと、体長1・5メートルほどのシカが池に入っていた。何だかあの光景が気になり、今月13日に宝が池を再び訪れた。池のほとりの西側の斜面で、シカ4頭の群れと遭遇した。逃げるそぶりはない。人に慣れている。シカは枝葉や樹皮を食べ、木で角を研ぐので森が荒れる。好物の新芽を次々に食べるので、シカの背丈が届く高さまでは森がスカスカだ。

貸しポート屋を営む宝池観光の社長で、地元の松ヶ崎自治連合会長の岩崎猛彦さん(75)は「10年前くらいからシカを見るようになった。えさをあげる人がいて、数年ほど前からすみ着いた」と話す。子どもには森でまきをとり、秋にマツタケを探る生活の場だったが、様変わりしたと感嘆している。池は1周1・5キロ、面積にして7・7畧だ。岩崎さんから池の成り立ちを教わり、郷土史「松ヶ崎」を読んでみた。水がわき出していた田んぼをため池に改良するのが始まりだとわかった。江戸中期の1763年、水不足に悩む村人が、ため池を造りたいと役所に願った。

宝が池は地下鉄烏丸線国際会館駅から徒歩10分ほど。叡山電鉄宝ヶ池駅から徒歩約20分。森を彩るコバノミツバツツシの見ごろは4月上旬。宝が池公園子どもの楽園(075・781・3010)は、プレイパーク、遊具、広場がある。スタッフと一緒に遊ぶ「自然あそび教室」は、主に土曜日に開催。近い日程では、野鳥の観察会(5月5日)、堅穴式住居の改修(6月2日)、川遊び(7月7日)が予定されている。池は足こぎと手こぎのポートで周遊できる。足こぎは30分、手こぎは1時間で各1千円。

誕生した池は1855年には拡張され、現在の広さになった。池の名の由来ははっきりしない。水不足が解消され、宝の池のようだと考えたという説。池の形が分銅形で小判に似ているからという説。そんな諸説がある。シカの食害やマツ枯れ、ナラ枯れにより森は荒廃した。森づくりを話し合うシンポジウムをきっかけに、地元住民と研究者らが連携して森を守る取り組みを始めた。

地元住民や研究者らは2015年、「宝が池の森」保全再生協議会を発足させた。シカは左京区の大原から市中心部へと流れる高野川沿いに来て定住したとみられる。園内は鳥獣保護区で狩猟は禁止。市はわなを仕掛け、昨年度は22頭を捕獲した。

池の南東の森に先月上旬、五山の送り火「法」がとれる斜面のそばに高さ2メートルの柵を設け、約100畧の範囲を囲った。春に紅紫の花を咲かせるコバノミツバツツシを守るためだ。ここはツツシのトンネルが楽しめる名所だが、シカの食害で荒れ始めていた。森の再生をめざして寄付を募り、メンバ

シカの食害… 再生へ取り組み



池の周辺に現れたシカの群れ。看板には「えさを与えないで」と記されていた

「たちで侵入を防ぐ柵を手作りした。池の北東側に見える国立京都国際会館は1997年、先進国に温室効果ガスの排出削減を義務づけた京都議定書が採択された場所だ。協議会会長で府立大教授の田中和博さん(64)は森林計画学が専門。「宝が池は都市部のオアシスであり、環境問題のシンボル。再生や保全の取り組みを続け、次世代にその魅力を伝えたい」

園内には、遊具と広場がある「子ども楽園」がある。49年に市営の競輪場ができたが、地元の反対も根強く58年に廃止され、公園に生まれ変わった。楽園の奥には2008年、雑木林のプレイパークが完成した。子どもの笑い声が響き、丸太にのりつけたブランコが揺れていた。ここで「自然あそび教室」を開く野田泰栄さん(51)は、動物のクイズを出していた。「カメ、トカゲ、カエル、ヘビ。この森で一番多いのは?」。悩む子どもに「カエル」と正解を伝えた。

「自由に山遊びを楽しみながら、自然への理解を深めてほしい」と野田さん。小学生のときにここで遊び、今ではスタッフを手伝う高校生らも複数いる。森は自然な形で次世代へと受け継がれていた。(徳永猛城)

デジタル版に動画



①宝が池のほとりでくつろぐ親子。奥は京都国際会館
②池を見守る地元の自治連合会長の岩崎猛彦さん
=いずれも左京区松ヶ崎

